

## 〈寄稿論文〉

## コスモスの臍\*

— ブキドノン人の子供の出生と発達に関する民俗心理学的研究 —

河 合 利 光\*\*

## 1. はじめに

近年、特定の人類学者は、民族誌的記述の際、科学的心理学で使用されている学術用語の概念枠組みを現地の感情語彙の記述に使うことについて、疑問を投げかけるようになった。その一人のキャサリン・ルッツは、「このように文化的な基盤の共通性は限られているので、アメリカ社会で区別し、概念化され、経験している感情そのものを普遍的と考えたとしたら、それは驚くべきことであろう」(Lutz 1985: 38, cf. 1987: 308-309, 1988, Lutz and White 1986: 423) と書いている。

筆者はそのような視点の転換を望ましい方向であると考え。なぜなら、たとえ心理的能力が生まれつき同じであったとしても、身につけている文化とか自身の住む社会環境の違いにより、感情表現だけでなく、知覚も受け取り方も異なることは明らかだからである。その主張は、日本人の日常経験に照らして考えても納得しやすい。

土居健郎の『甘えの構造』(土居 1973) を参照するまでもなく、感情語彙に関する様々な事例を挙げるができる。例えば、日本の言語には(他の国々にも似た表現はあるが)、無数の「身体言語」(organic talk) がある。ムラムラする怒りを表現するとき、「腹が立つ」とか「腹が煮える」と言う。同様に、少し嘲笑しながら人を笑うと

き、「片腹痛い」とか「臍が茶を沸かす」と言う。この種の表現は極めて豊富なので、一冊の本になっているほどである(佐竹 1984参照)。

筆者は、もちろん感情語彙そのものの分析の重要性を軽視しているわけではない。しかし、本稿の目的は、純粋な意味での民俗(民族)心理学的研究というよりは、フィリピン共和国ミンダナオ島のブキドノン州に住む諸民族の一つであるブキドノン人の宇宙観、つまりコスモスの秩序(cosmic order)全体と心身との対応関係を考察することにあるので、感情語彙はその研究の手掛かりの一つとするに留めたい<sup>1)</sup>。繰り返せば、本稿では、「心の文化的構成」と「コスモスの秩序」とが、どのような共通の文化的基盤に基づいて構築されているかを明らかにしたい。そのため、特にブキドノン人の子供の妊娠・出産と発達の慣習を中心に、コスモスの秩序が文化システムとしての(心身の)民俗心理的カテゴリーと、どのような関連性があるかについて考察する<sup>2)</sup>。

## 2. ブキドノン人のコスモロジー

ブキドノン人は、ミンダナオ島北部のブキドノン州の山岳地帯を中心に居住している人々である(図1参照)。19世紀後半まで、彼らはスペイン文化の影響をほとんど受けることなく、焼畑耕作を営み、自給自足的な固有の文化を維持していた。

\*キーワード：ブキドノン、産育、自然と文化の合一性

\*\*園田学園女子大学人間教育学部教授

- 1) 本論の論題は、ミクロネシアのトラック(現チューク)諸島の調査経験と直接的に関連がある。その地域では、感情の座である腹は思考の座である頭と対照されている。身体その2つの中心は、より広い社会-文化的脈絡の認識的焦点である(Kawai 1983参照)。本稿に記した文化にも、基本的に同じ民俗心理学的視点が適用できると考える。
- 2) 筆者のフィールドワークは1984年、1986年、1988年にミンダナオ島ブキドノン州のマライバライ市で行われた。調査地の概況は別稿に記した(Kawai 1986, cf. 結城 1985)ので、ここでは詳述しない。

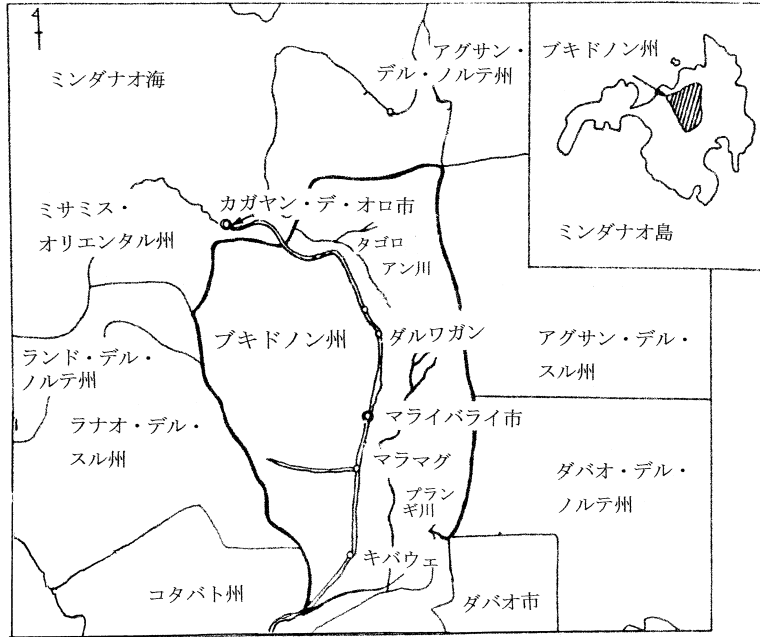


図1. 北部中央ミンダナオ島ブキドノン州略図

1889年の4月から5月まで北部中央ミンダナオ島に滞在したことのあるクロテット神父は、その後、マニラの上司に「彼らは多神教で、四方位に四神（北のドマロンドン、南のオングリ、東のタガランボン、西のマグババヤ）がいます。知恵と力でもって私たちの住むこの大きな世界の仕組みを規制し統治しているのが、これらの神々です」と報告した (Clotet 1989, cf. Lynch 1955:469-70)。

クロテットのその報告は、その後、この地域を調査した研究者により厳しく批判された。北部ブキドノンの山岳地帯を広く調査したコールは、天上と地下と四方位にいるのはマグババヤであり、クロテットが記したドマロンドンとオングリは、祈祷師の守護霊だと主張した (Cole 1956:93-94)。また、北部ブキドノン州のプランギ川上流のブキドノン人を研究したピアナツキーも、クロテットの見解を次のように批判した。

精霊タガランボンは（もしそれがあるとしたら）、私のデータからすると、ふつうの人のムリンウリン (*mulinulin* 河合の調査地のモリンオリン *molin-olin*—訳注) に当たるが、

もっと強力なダトゥ（伝統的リーダー—訳注）の私的「指導霊」ドマロンドンと同じものであるように思われる。クロテットが「四つの基本方位の四神の一人」としてタガランボンを挙げている (Blair and Robertson 1906:294) のは、私のデータと合わない。私のインフォーマントによれば、東と西にのみ「重要な責任をもつ精霊」(*migbayá*) がいるが、南北は東西のバランスをとる以外、ほとんど神話的意義をもたない……。 (Biernatzki 1973:36、訳注は河合)

筆者がブキドノン州のマライバライ市のダルワガン (Dalwangan) 管区を中心に収集したデータは、コールやピアナツキーの報告に似ている。四方位にマグババヤが住み、天の中心と地下にもマグババヤがいる。南北の精霊は、東西の精霊ほど重要ではない。前者の方位の精霊は同じものと考えられている。その四方位の相対的な重要性の差は、ブキドノン人が太陽の軌道を重視する事実に対応している<sup>3)</sup>。

天の中心に座すマグババヤは、その中でも特に

3) 筆者の調査によると、クロテットの報告するタガランボンとドマロンドンは人間の守護霊である。

重要であり、人間の運命だけでなく四方と森羅万象の諸精霊をコントロールする精霊である<sup>4)</sup>。筆者が高位のダトゥから直接聞いた話によると、オラギン (*úlagin*) と呼ばれる天の中心にまつわる神話的英雄詩の中には、死後、天の中心にある穴を通して昇る文化英雄、バイバヤン (*Baybayan*) の物話がある。

それによると、遠い昔、同様にブキドノンの文化英雄であったアギオとバタイが、タゴロアン川で彼らの最後の儀礼 (*pamuhat*) を行った。二人はその儀礼のために鶏を殺して料理し、その肉を平等に分けようとしたが、どうしても端数が出て、うまくいかなかった。彼らは3回その肉片を数えようと試みたが、均等に分けられずに終わった。そこで、アギオが、それは誰かが近くにいるサインに違いないと言った。辺りを見回してみると、川の堤にバイバヤンがいたので、その(残りの)肉をバイバヤンに与え、彼を次の儀礼の専門家 (*baylan* バイラン) に任命した。

二人が死ぬと、バイバヤンがバイランになった。彼とその仲間をよく働いたので、その近くのすべての丘と山が作物で覆われた。その人々は性格が高貴であったので、不死身となり天に召された。彼らが天に昇っていくと、「天の臍」(*púsud ta langit*) が開いて、彼らを受け入れた。その途中、バイバヤンは噛んでいたベテルナツトと石灰を地上目がけて投げつけた。そのベテルナツトは鼠と樹木の葉とフィリピンの国鳥であるマヤと呼ばれる鳥に変わり、石灰は地上の昆虫になった。

ブララカウ、ララワグ、イババソック、パマハンディその他の人々は、死後も地上に残り、様々な精霊となった(それらは精霊の名前であると同時に儀礼の名前でもある)。例えば、ブララカウは水の精霊となり、ララワグは猟師の守護霊に、イババソックは作物の守護霊に、そしてパマハンディは財産の守護霊になった。一人のインフォーマントは、「天の臍」の上にはこの世に似た世界があり、しかも善良な人だけが、そこでマグババヤとその従者の人々と共に暮らしていると語った。

さらに、彼らは、天だけではなく、どこにでも

臍があると考えている。既述のオラギン(神話的英雄詩)の中には、アギオとバタイとバイバヤンが「土地の中心」から天に召され、しかも、オラギンと民話の登場人物の全員が、世界の終末が近づいたとき、その土地の中心に戻ってくると説明しているものもある。しかし、その中心がどこかははっきりしない。インフォーマントのダトゥに説明を求めると、「精霊の住む空の中心の反対側」であるとか「儀礼をする場所」といった返事が返ってきた。

海の中心もまた、ブキドノンのコスモロジーの理解のために重要である。というのも、彼らは世界のすべての水が「臍」、つまり海の中心に流れ込むと信じていたからである。「水の流出口がなければ、人間はとっくの昔に溺れている」と彼らは言う。この問題に関して、以下のようなピアナツキーの報告がある。

第1幕の話では、大蛇がとぐろを巻いて、世界の底から水を排出させる海の中心 (*pusud hu dagat*) の穴を塞いだとき、大洪水が起こった。豪雨が続いたので、洪水になった。ガヘメン(「力・権威」を意味する *gahem* に由来する言葉) という妊娠中の未亡人が、浮き木につかまって洪水の中を漂い、まだ水浸しになっていない僅かな土地の一つ、南西のミサミス・オリエンタル(カラブガオの土地を見渡す意味)のキマングキル山の山頂に打ち寄せられた。水が引いてから、彼女は息子を産み、テヘバンと名づけた。テヘバンは成長して母親と結婚し、長男パブルセン、次男アーヤウエン、三男タウエンの3人の息子をもうけた。(Biernatzki 1973: 18)。

これは伝統的リーダー、ダトゥの起源神話である。筆者の調査地ではこの話は聞かれなかったが、「海の臍」に関する考え方が共有されていることは、ここからも明らかである。ガヘメンという名前は「力・権威」(筆者の調査地では *gahum*) を意味するが、山と結びつくダトゥ、祈祷師、産

4) 「天の臍」、つまり天の中心は、太陽の登る軌跡の中心を指す。神話によると、マグババヤは太陽の恵みを与え、作物を育てる神とされる。

婆が精霊から得る神秘的力に由来する言葉であるから、注目に値する。高い山は天空に向かって延びているゆえに、その山頂は天と同一視される。事実、人々が死後に赴くとされる「バラトゥカン山」(Mt. Balatukan)と呼ばれる山があるといわれる<sup>5)</sup>。その山のイメージは、先に述べた天の中心(天の臍)に、よく似ている。

また、現地の住民が明確に説明しているわけではないが、伝統的家屋とコスモスの構成の間に類似性があることも明らかである。いかなる住居(杭上型家屋)にも、屋根と床に精霊の宿る中心があるとされる。床下の精霊は、ちょうど地下の精霊マグババヤが両手で世界全体を支えるように、家全体を支える。家屋の4つの基本方位は無限である。しかし、一般に、窓、階段、竈のような各所に精霊がいると考えられている。パタ・プラグスラットと呼ばれる精霊は、人間の日ごろの行いを監視し、それを天のマグババヤに報告するという。

先に述べたように、「世界の臍」(*púsud ta kalibutan*)に住むマグババヤは、すべての精霊の中心である。マグババヤの配下の精霊は人間界で起こることをすべて把握しており、協力して天のマグババヤにそれを報告するという。出産と育児の慣習は、そうしたコスモロジーを考慮することなしに理解しえない。儀礼は、主に、マグババヤの統制下で、悪霊により引き起こされる災いや不幸を祓い、予防するために実施されるものだからである。

### 3. 子供の出生と育児

#### (1) 出生と精霊世界

筆者は、すでにこの問題については論じたことがある(Kawai 1986, 1988; 河合 1990)ので、本稿の目的と直接的に関連のある側面に限って、以下に論じることにしたい。

偉大な精霊に関わる儀礼では、常にそれらを呼び出して祈願することが必要である(その事例は、写真1、写真2を参照のこと)。「天の臍」のマグババヤが最も重要であることは言うまでもない。女性が妊娠すると、マグババヤは従者の一人を靈魂(*gimukod*)として遣わす。このことは、マグババヤが子供の運命を予め決めるといふ信仰と関連がある。後産が家の床下に埋められたり木に吊るされたりした後、マグババヤはそれを天に



写真1 ブキドノン人に編入する儀礼 (*pangampo*)

1986年にインバスグンの人里離れた場所で行われた。このとき、33人のビサヤ系民族がブキドノン人として編入された。まず黒い布が「子供たち」(編入される人々)の頭に置かれ、次にそれが白い布に置き替えられた。その儀礼は、悪霊を祓い、善霊を吹き込むことを意味する。



写真2 世界の諸精霊に祈りを捧げるダトゥ

ダトゥは手に白い鶏を持って祈る。その後、編入される人々が白い鶏を持ち、それを殺して精霊に捧げる。

5) バルトゥカン山は想像上の山である。それはいつも雲に覆われており、死者を迎えるための料理を作る煙が漂っていると伝えられる。食事をして捨てられた骨が川に見られるという。コールは「もし地上にいる間に悪人であったら、Dildilosanと呼ばれる燃える丘に精霊ゴモゴナルが連れて行き、その人は食べられてしまうと言う人もいる」と述べている(Cole 1956: 92)。しかし、彼はそれをビサヤ系の人々と接触した結果であろうと疑っている。筆者もそのゴモゴナルの存在を確認できたが、そこは善人だけが行ける場所だと聞いた。そこがバルトゥカン山と同じ場所であるかどうかは、確かでない。



写真3 赤ん坊を取り上げる男性産婆

男性産婆は生まれた赤ん坊を布に包み、産婦は夫の首に手を回している。



写真4 床下に後産を埋める産婦の夫

運んで守護霊を吹き込む(写真3、写真4参照)。その霊は新生児のキョウダイ(兄弟姉妹)となる。また別の人は、ドゥンガン(*dúngan* 同時に生まれる精霊)が、分娩と同時に赤ん坊と共に生まれ、その守護霊になるのだという。

いずれにせよ、赤ん坊が生まれると、それを取り上げた産婆ないし祈祷師(産婆を兼ねることも多い)は、しばしばその臍の緒に凶兆を見つける。以下のような4種類の凶兆がある。

- 1) ラホン(*lahong*)—「腸」の一部が臍の緒と平行に走っていることがある。その2本の紐は、棺を担ぐのに運ぶ棒に似ている。プキドノンの言葉では、その棒がラホンと呼ばれている。
- 2) カトゥグラワン(*katuglawan*)—臍の緒上の黒点の数が、赤ん坊の生きる一生の年数を示している。
- 3) カヤバン(*kayaban*)—後産の孔や擦り傷もまた、不吉とされる。それは、呼吸器官に欠陥があるので長生きできないことを意味する。
- 4) カラワン(*karawan*)—カラワンとは、籐のロープのことである。臍の緒上に結び目の印があると、将来、自殺する運命にあることを示している。子供の生きる年数は、臍の緒の結び目の数で数えられる。

悪霊を祓う儀礼は、赤ん坊に害を及ぼす凶兆が現実にならないよう、あるいはそれを祓うために行われる。祈祷師(産婆)は白、黒、赤の鶏を使う。黒色は悪霊を、白色はモリンオリン(赤ん坊の指導霊)を、赤色は別のモリンオリン(*talabusaw*

と呼ばれる指導霊)を表している。凶兆は、すべてアントカ(*antoka* 推測の意味)と呼ばれる。したがって、赤ん坊の凶兆もアントカである。精霊は次のように呪うと考えられている。「私が誰だか分からないなら、この赤ん坊に災いを与えてやろう」。祈祷師はそれを避けるために、その悪霊の名を推測しようと試み、そのための助力をマグババヤその他の精霊に依頼する。

新生児の異常はすべて、天のマグババヤが与えてくれた運命と考えられている。子供の首に臍の緒が巻きついて生まれるのは、赤ん坊が自殺する運命にある印である。その悪い運命を避けるためには、アグバドバルン(*agbadbarun*)と呼ばれる儀礼を実行しなければならない。その凶兆の効果は無効にするために、儀礼では鶏の血が臍の緒に垂らされる。

双子は歓迎されるが、パンギムコッド(*pan-gimukod*)と呼ばれる特別な儀礼が、災いを避けるために行われなければならない。その儀礼は、指輪を交換することで双子の赤ん坊のバランスをとるためのものであるが、もし自然のバランスが崩れると二人の間に破壊的・競争的關係が生じ、どちらかの子供の魂を傷つけ、病気を惹き起こすという信念に基づいて行われる。別の類似の民間信仰に、もし親が片方の子供だけに愛情を注ぎすぎると、他方の子供の魂が身体から去って病気になるというものもある。子供の双方が公平になるように、日常生活全般にわたり配慮しなければならない。

表1. 幼児の発達過程

発達段階	現地語 (binukid)	特徴
2週間まで	<i>agtib-ug un</i>	母親のミルクが体内を巡るので赤ん坊が遅くなる意味。
1ヶ月		赤ん坊が無邪気に微笑み始める。
2ヶ月	<i>tagapatawa taghulaw-hulaw</i>	周りを見回し始め ( <i>agtungtung un</i> )、初めて父母を認識する。
3ヶ月	<i>tagtakilid un</i>	寝返りをする。
3ヶ月	<i>taglangkud un</i>	その二、三日後、頭を持ち上げて何か咄く。その音は、“ <i>tagmo-aw un</i> ” と聞こえる。
6ヶ月	<i>tagtakirid un</i>	胸を使って這い始める。
6ヶ月	<i>tug-ugu-ugu</i>	話しかけると反応し始める。
8ヶ月	<i>agpu-ona un tagpanapap</i>	腕で体重を支え、床から身体を持ち上げることができる。
10ヶ月	<i>tagpananap un</i>	手と膝で這って前に進み始める。
11ヶ月	<i>tagpangulipit</i>	物を持ち、年長者につかまって歩くことができる。
1年	<i>taglakad un</i>	歩もうとするが転ぶ。
1年数ヶ月	<i>taghipanaw un</i>	しっかり歩き始める。
1才半から	<i>tag-ikagi-un</i>	よく意思疎通ができるようになる。
2才		

(2) 子供の発達段階

幼児の発達には多様な段階が区別されている。表1を見れば、ブキドノンの人々が発達心理学的段階を微細に観察しており、しかもその主要な基準が身体的発達と言語能力の変化に集中していることが分かる。彼らはその発達過程を客観的に観察しているように見えるが、尋常でない現象を、超自然的力が惹き起していると解釈することもある。例えば、歯がすべて生え揃って生まれたとき、それを「家族への精霊の呪い」(*magulagpanungayan*) と呼ぶ<sup>6)</sup>。

同様に、母乳が足りないとき、その母親はまず、熟したパイアを食べるか川で捕れた3種の魚で料理したスープを飲んで、栄養不足を補おうとするだろう。その夫が森からとってきた、パイアの木の根その他の蔓を煎じた飲み物を与えることもある。いずれにせよ、何か悪霊の災いにより生じたものと見なされ、その原因を取り除く儀礼を行うことがふつうだと彼らは言う。

子供の病気は精霊に関連があると理解されている。それに関わる2つの儀礼は、バリワスン (*baliwasun*) とギムコルン (*gimukoron*) に区別されている。

まず、バリワスンは凶兆を意味する。儀礼をすることで、想定される精霊の災いした病気の原因

を取り除く。病気は木々、川、山頂、大岩その他に棲む精霊により生じるかもしれない。呪文の内容と場所は、それゆえ、儀礼の目的、占いの内容に合わせて調整されなければならない。そのプロセスはたいてい決まっているが、儀礼の道具は変わる。ふつう、小石やベテルナツトを入れる金属製の箱 (*latuan*) その他の精霊への供物が使用される。筆者のインフォーマントの祈祷師の一人は、パマハンディプティ (*pamahandiputi*) と呼ばれる小瓶を持っていた。因みに、パマハンディとは、財産と幸運をもたらす精霊のことである。その祈祷師によると、その小瓶の精霊は、どの精霊が病気を起こしているかについて、彼女に教えてくれるのだという。また、その魔法の油の入った瓶は、彼女の患者の治療にも使われている。

占いの間に彼女が呼び出す重要な精霊の1つは、「海の臍」に棲む精霊である。その精霊は、ちょうど海の波を統御するように人間の心も統制する、と彼女は述べた。祈祷の後、その祈祷師は、どんな動物を供犠して欲しいか、どんな供物をすべきかを精霊に尋ねる。

バリワスンは諸精霊をまとめた名前の1つであるが、ギムコルンは魂 (キムコッド) に関連のある呼称である。それは2種類に分かれる。1つは祖父母のような近い親族の霊が災いを及ぼすと

6) 乳歯が抜けると、竈 (*abo*) の灰の中に埋められる。竈には鍋を置く硬い石が置かれているが、その慣習は永久歯がその竈の石と同じくらい固くなって生えるという信仰に関連がある。歯が生え始めると、そこに蜂蜜を塗る。その蜂蜜は、蜂が方々から集めてきたものなので、栄養があるばかりでなく医療効果があると信じられている。

いう信念に基づく儀礼で、もう1つは守護霊ないし魂が身体から離れて病気になるという信念に従って行われる儀礼である。

前者のギムコルンの一例は、老人の儀礼 (*agimukorun ta mga laas*) である。祖先は子供の未来を予測する能力があると信じられている。死者の魂は、子供の不幸な運命を哀れに思い、子供が辛い目にあう前に殺そうとすることがある。後者の例は、上述の双子の儀礼のパンギムコッドである。それは怒って身体から去った靈魂を呼び戻す儀礼である。彼らは、愛情をもって子供を育て、その魂が離れないよう注意する。親は、あまり子供を叱りすぎないように育てるべきだと、周りからも助言を受ける。親が子を厳しく罰しすぎたとき、次のような儀礼を行うことがある。まず、卵を茹でてそれをライスと共に1つの皿の上に置く。それから諸精霊に、来て食べるよう求める。次に子供を、その皿の近くに座らせる。母親は、子供の頭の上にその皿をかざして、子供の魂が怒らないよう祈る<sup>7)</sup>。

パンギムコッドの理念を最もよく表していると考えられるのが、ポララ (*polala*) と呼ばれる竹製の笛である。かつては米の収穫期に、その仕事を始める前の夜明け方、それを吹いた。それに合わせて、祖先の歴史や英雄詩が歌われた。ポララはそのような状況で使われた楽器である (Clotet 1989, cf. Lynch 1967: 478)。筆者の調査によると、その笛は、口頭で子供を叱る代わりに子供を諭すのに使われることがあるという。親や祖父母のような年長者は、ポララでもって子供に過ちを悟らせ、良い子になるよう助言しようとする。「坊や！もう年だから、ワシもこの世でそれほど長くは生きられない。でも、お前を養うために一生懸命働いているんだよ。良い子でいておくれ。ワシは早かれ遅かれ死ぬんだから。」

子供はそのメロディの意味を前もって知っている。その慣習は、口頭で強く叱りすぎると、子供の魂が抜けて病気になるという信念を前提としている。逆に、ほめ過ぎも勧められない。例えば、

子供がとてもハンサムで人に褒められすぎると病気になる。そのような状態は呪い (*tungayaw*) と呼ばれ、バリワスン儀礼でそれを祓わなければならない。

#### 4. 感情と思考の文化的構成

さて、子供の出産と育児の慣習は、コスモロジー体系 (文化) に位置づけることで理解が深まることは、すでに明らかである。先述のように、コスモスは世界の創造主であるマグババヤにより統治されている。天のマグババヤは、四方位の神々、海を中心、土地、家屋、山々、木、岩などに棲む精霊たちと協力して活動する。プキドノンのコスモスの秩序は、天の偉大なマグババヤに統制されているのである。

ここで筆者がコスモスの秩序と呼ぶものは、プキドノンの人々がバタサン (*batasan*) と呼ぶ文化的秩序を指している。その言葉は調査者と現地の人々自身により「慣習」とか「不文法」と呼ばれることがあるが、それにはもっと広く深い意味がある。

バタサンは、かつて人間であったマグババヤの従者、アポ・バタサンにより創られたと伝えられる。それは人間の秩序、道徳、慣習、個人の習慣、儀礼、商業上の関係などを規定している。その秩序は、精霊により監視されているといわれる。バタサンに由来する言葉、ナバタサンは「自然」「当然」の意味である。要するに、バタサンとは人々が「自然・当然」と感じるゆえに従わなければならない文化秩序である。ここではその問題を詳述することはできないが、バタサンとはプキドノン人により順守される「文化的・自然的」秩序であると説明するだけで、さしあたり充分であろう。

ここで、文化体系としてのコスモスの秩序と民俗心理学的カテゴリーとの合一性 (*congruence*) の問題に戻ってみよう。プキドノンでは、すべての人に、最高神の天のマグババヤにより遣わされ

7) 赤ん坊が病気になる、その魂は他の両親を探しているのではないかと疑われる。もし占いでその親が判ると、実の親は自分の子供をその親に預ける。彼らはその子供を儀礼的に受け取り、実の親の代わりに面倒をみる。その後、何羽かの鶏が精霊に捧げられる。病気の子供をそのように扱うのは慣習であるが、そのパンギムコッドの儀礼にも同様の意味がある。

た霊魂と守護霊がある。幸運だけでなく人間の行動、思考と感情はマグババヤとその従者の精霊により統制されている。このことは、特に一般の人々よりも強力で優越した精霊に導かれるダトゥ（政治的リーダー）、祈祷師、産婆、長老のような、人々から尊敬を受ける立場の人々についていえる。彼らの神秘的力（権威）は、それらの精霊から引き出される（河合 1988）。つまり、人間の運命、感情、思考、行動はすべて精霊によりコントロールされている。その考え方は、感覚、感情、思考の民俗分類にも表されている。

筆者は研究を開始した当初、必要だろうと思われる語彙の辞書的リストを、試み的に作成してみた。けれどもすぐに、その語彙の規定が明確でなく、膨大な作業が必要なが分かった。そこで、視点を変えて、プキドノン人自身が、それらの語彙をどのように分類しているかについて調べることにした。筆者はプキドノン出身の助手の手を借りて、人々が感情、感覚、思考、心の状態をどのように分類し、それらのカテゴリーにどのような意味を与えているかについてインフォーマントに尋ねた。表2は、調査地でまとめたものである。筆者は、故意に誘導尋問は避けた。筆者の作

成した表の民俗カテゴリーについては、後に、少なくとも数人の情報提供者に確認をもらった。

しかし、その表を完全なものと考えてはならない。心的・精神的現象のような複雑な諸問題を扱う場合には、完璧は決して期待できないからである。例えば、感情の概念の意味は社会状況に応じて変わるし、特定の矛盾した感情が同じ語彙に同時に含まれる可能性もありうる。そのような限界はあるにしても、民俗心理的概念を調べること自体には価値があるだろう。なぜなら、そのカテゴリーは、プキドノンの文化的論理に従って構成されていると考えられるからである。

感覚、感情、思考に相当する包括的語彙はアグカグラム (*agkaguram*) である。それは大きく「外側のアグカグラム (*gawa*)」と「内側のアグカグラム (*susud*)」に分類される。前者は、皮膚を通して知覚される感覚以外の内的感情を表す。他方、後者の「内側のアグカグラム」は、「病気」「怒り」「願望」「満足」「苦難」「思考」という6つのカテゴリーに細分される（表2参照：翻訳に当たっては事例の一部を省略した。アグカグランは「気分」とか「気持ち」とも翻訳できるであ

表2 感情と思考の民俗分類

<p>I. 外側の「こころ」 (<i>agkaguram dini ta gawa</i>) 暑い、温い、寒い、眠い、等。</p> <p>II. 内側の「こころ」 (<i>agkaguram dini ta susud</i>)</p> <p>a. 病気の「こころ」 (<i>agkaguram no ha agdaluwan</i>)</p> <p>(1) 身体の (精神的) 痛み</p> <p>(2) 肉体的痛み：頭痛、胃痛など</p> <p>(3) 嫌な感じ：悲しみ、不幸、ホームシック、孤独など。</p> <p>(4) 身体の衰弱</p> <p>b. 怒りの「こころ」 (<i>agkaguram no ha agkapa-ok ka</i>)</p> <p>(1) 嫌悪</p> <p>(2) 憎悪</p> <p>(3) 羨望：この感情は怒りを惹き起す。</p> <p>(4) 騒々しさで生じる「こころ」：怒りを惹き起す。</p> <p>(5) 憤慨 (<i>tagmahay</i>)：憤慨により生じる痛みの感情。失望、苦々しさ、困惑、恥などがこれに含まれる。</p> <p>c. 願望の「こころ」 (<i>agkaguram no ha agkabaya-baya ka</i>)</p> <p>(1) 食物に関する「こころ」：食べたい、飲みたい、喉が渴いた、腹が減った等の感情。</p> <p>(2) 物質に関する「こころ」：羨望。b-(3) と重複。</p> <p>(3) 愛の「こころ」：憐れみの感情を含む。</p> <p>(4) 行動に関する「こころ」：狩猟に行きたい、家を建てたいなどの欲求。</p> <p>d. 満足の「こころ」 (<i>agkaguram no sa agkabaya kan dan</i>)：幸福、快適、喜びなど。</p> <p>e. 苦難の「こころ」 (<i>agkaguram no sa malisud ha agka-ula-ula</i>)：貧困のような辛い心理状態。</p> <p>f. 思考の「こころ」 (<i>agkaguram dini ta huna-huna</i>)：意識、理解、懸念など。</p>
--



うが、それでも適訳とはいえない。以下では、便宜的に「こころ」と表記することにする（一訳注）。

- 1) 病気の「こころ」—単なる怪我は病気ではない。病気は身体の内側で感じる感情的不快感とか苦痛を伴うものでなければならない。不幸、悲しみ、失恋がこのカテゴリーに入れられているのは、そうした理由による。過労、睡眠不足などが病気の原因になることも彼らは否定しないが、一般に病気は精霊により惹き起こされるものと考えている。そのような不快で苦痛な感情には、ほとんど常に怒り (*agkapa-ok*) を伴う。
- 2) 怒りの「こころ」—「嫉妬」「羨望」「嫌悪」等の否定的感情も怒りを伴う。タグマハイ (*tagmahay*) という言葉は特に注目に値する。なぜなら、それには憤慨、失望、苦々しさ、困惑のような意味あいがあるからである。ブキドノンの人々は、怒りを精霊の関与する事柄と見なす傾向がある。人は怒りを他者に表すが、それを誘導するのは精霊である。
- 3) 願望の「こころ」—広範囲の感情がこのカテゴリーに含まれる。簡略化のために、筆者は「願望」を4つに分類した (表2のII-C参照)。一瞥しただけで、「食物」「愛」「物質」「行動」が同じカテゴリーに含まれていることが分かる。ブキドノンの慣用句「愛することは与えることだ」 (*gagaw sa kag-ila*) は、その民俗心理学的分類に一致する。「憐れみ」が「愛」と同じカテゴリーであることは、「憐れみ」が「愛」「慈しみ」「食」等を与える感情を伴うということである。
- 4) 満足の「こころ」—それは、欠乏が満たされ、願望が実現されるか、苦痛が取り除かれた状態のことである。人は願望が満たされると、喜び、幸福、満足を覚える。そのような心理状態が満足の「こころ」と呼ばれる。
- 5) 苦難の「こころ」—その感情は、ふつう生活苦と結びついている。
- 6) 思考の「こころ」—人が考える (*huna-huna*) こと自体、ある種の「こころ」であるが、思考の仕方は、時には全体から区別され対照さ

れるため、「思考」は独立のカテゴリーとして分類されている。

これらのサブ=カテゴリーのうち、病気の「こころ」と怒りの「こころ」は、直接的に精霊界と結びついている。もちろん、その他のカテゴリーが精霊と無関係というわけではない。人は常に指導霊から良いアイデアを得ることができる。精霊は人間に良い行いを実行させ、人間は満足の「こころ」をもつ。自身の守護霊を忘れると、人生は惨めになり苦難を感じることになる。

それにも拘らず、病気と怒りの「こころ」は特に重要である。なぜならその2つは、ブキドノン文化に特徴的なカテゴリーというだけでなく、ブキドノン人自身が考えている民俗心理学的カテゴリーと精霊との密接な関係を表現しているからである。

その両方の感情は文化に根差し、互いに密接な関連がある。病気の「こころ」は、ほぼ常に怒りを惹き起こし、逆に精霊の怒りは人を病気にさせる。感情は個々人の自発性と内的な意図で決まるというよりは、精霊により惹き起こされるとされる。人を勇敢にさせるのはタブサウとかタラフグカと呼ばれる守護霊である。「こころ」のカテゴリーに含まれる呪いは悪霊により惹き起こされるが、もしそれでも怒らないなら、善霊がそれを鎮めているとされる。要するに、人間の感情や感覚は、コスモスの秩序の脈絡で解釈されているのである。

## 5. 身体器官と「こころ」のコスモス

前節で論じたように、ブキドノンの感情と思考は彼らの世界観と一致する。人間と精霊との関係性を考えるには、特にその2つのカテゴリー（病気と怒り）がキーワードとなる。

ロサルド (1980) は、北部ルソンの首狩り族イロンゴットの文化で、「怒り」 (*liget*) の概念に中心的役割があることを示した。怒りの文化的重要性は、ミンダナオ島のブキドノン人についてもいえる。ブキドノン人は、ほとんどの不幸は精霊の怒りにより生じると考えている。通常、憎悪、騒音への苛立ち、羨望、恥のような否定的感情は、

悪霊と同一視される。言い換えれば、人間の感情は精霊との関わりで解釈され、精霊に転嫁される。

さて、ここで人がどの身体器官で「こころ」を知覚するかについての疑問が生じる。感情と思考の座には、2つの身体器官が区別されている。ブキドノンの人々は、明らかに、頭の中で考え、恐怖を感じる (*huna-huna* 思考の意味)。しかし、感情の座に関しては、それほど明確ではない。今では、キリスト教の影響もあってか、感情の座はふつう心臓 (*pusong*) で表されるが、伝統的には肝臓 (*atay*) でもあったと考えられる。肝臓は心臓とキョウダイとされ、心臓も肝臓も胸に含まれると見なされるからである。以下に記す呪文が、それを理解する糸口を与えてくれる。それは異性の愛を勝ち取るためのものである。呪文を唱えようとする人は、顔に特殊な油を塗る。その油は悪霊から与えられたものとされる。

私の願いがあなたの言葉を貫き、あなたの心を捕え、あなたの肝臓 (*atay*) を奮い立たせ、あなたの心臓を揺すぶりますように。あなたがカニンバイ (*kaninpay*) を置いたかのように当惑しますように。あなたが大勢の人のいるときでさえ落ち着かないで、そわそわしますように。そのときあなたは知るので。私こそあなたが探しているその人なのです。

カニンバイとは、触れると痒くなる草のことである<sup>8)</sup>。「あなたの肝臓を奮い立たせる」とか「心臓を揺すぶる」といった表現には、特別な意味がある。さらに、次のような慣用表現もある。

- 1) 私の肝臓が痛い [*masakit sa atay ko*]
- 2) 私の肝臓が喜びのあまり飛び跳ねる

[*miglako sa atay ko*]

- 3) 私の肝臓が膨れるかのように感じる [*bas a ag-aragi atay ko*]

これらは、心の痛み、喜び、誇りをそれぞれ表す慣用表現である。心臓は感情を表す事例は、上述の呪術の呪文以外、聞いたことがない。

因みに、かつては、戦争中に敵の肝臓、脳、心臓が食べられることもあったという。筆者のインフォーマントは、憎しみが湧くと、守護霊のタラブサウが戦士に、殺した後すぐに食べるように仕向けたのだと述べた。さらに、「脳はとても柔らかいので、戦士は血だけでなくそれを啜った。肝臓もまた柔らかく、料理の必要はない。」と説明した。人々は食べる前に人肉を必ず家に持ち帰ったという意見もあるので、その説明は不十分のように筆者には思われる。しかし、カニバリズムがあったと認められていることは、肝臓、心臓、脳を「こころ」の座と考える彼らの民俗心理学的思考と、何らかの関連があると推測される<sup>9)</sup>。

ところで、人体の中心の座に関しては2つの見方がある。あるインフォーマントは肝臓 (*atay*) が身体を中心だと言い、他のインフォーマントは臍が中心だと述べる。前者は「こころ」が肝臓にあるという見解に関連がある。後者の見解は、世界の水は海の臍に流れ込み、そこに棲む精霊により人間の「こころ」がコントロールされていることを根拠にしている。この場合、海の臍はそこに棲む精霊と隠喩的に同一視される。

その矛盾したインフォーマントの見解を、どのように考えるべきだろうか。既述のように、頭だけではなく肝臓に「こころ」の座があるとされていることは確かである。臍が宗教的意味を与えられていることも、また明らかである。子供の出産と育児に関連のある信念と慣習に、次のようなものがある。

- 8) 多種類の草が呪薬 (*lumay*) として使われる。草の名前にはいくらかの意味がある。例えば、タラワタワ (*talawa-tawa*) は呪文のタワル (*tawal*) の発音に似ている。また、カルハ (*kaluha*) はいつも濡れていて、恋人の目に涙が出ることを想起させる草とされる。同様に、蜂蜜が呪薬と混ぜられることがあるが、蜂蜜は溶けやすいので、愛する人の心を簡単に溶かす意味で使われる。
- 9) 悪霊のブサウが人間の肝臓を食べる場合があるという。その精霊の一種のカプリ (*kapri*) は、人間を襲い、爪で犠牲者の胸を裂き、肝臓を引きずりだして食べる。また、悪霊は人間の血を飲むともいわれる。守護霊にそそのかされた戦士は、敵の血を飲むのを好むという報告もある (結城 1985)。血は情熱の色であり、伝統的慣習の基本的な色である。また、儀礼では、鶏や豚の血が流される。その血は、精霊への懇願、謝罪、感謝、願望のような感情と象徴的に結びついていると考えられる。

- 1) 新生児の臍の緒に認められる凶兆は悪霊の災いを防ぐために鶏の血でもって祓われる。その儀礼は既述の通りである。
- 2) 少年の臍が治ると、その乾いた臍の緒は小箱 (*kabuki*) に収められる。臍の緒はその前に綺麗な布で包まれる。後に子供が病気になると、それを取り出し鶏の血を垂らす。
- 3) 子供が病気になると、その子供の臍に生姜を当てることがある。それは乾季でも雨季でもすくすく育つ生姜の力にあやかる信仰である。
- 4) 生まれてから臍の緒の長さを測り、額まで延ばしてそこで切ると、子供が思慮深く育つ。

この最後の事例は特に重要である。額までの長さで臍の緒を切る行為は、知恵を象徴する。臍が、宗教と生命の意味を帯びていることは明らかである。要するに、「こころ」の民俗心理学的意味がコスモスの秩序に対応しているように、宗教的意味をもつ人体の中心の臍も、天の中心の神に統制されている諸精霊にコントロールされる「こころ」の座である肝臓も、精霊を通してコスモスの臍 (天の中心) に収斂されるという意味で連続性があるのである。

## 6. 結論

本稿は、コスモスの文化的秩序とその民俗心理学的カテゴリーとの対応関係を探ってきた。ブキドノンの産育慣行の理解のためには、人間の心的プロセスとコスモスの秩序全体を貫いている共通の文化的思考を理解しなければならない。

ここで最も重要な概念はバタサン、つまりブキドノン人が自然であるとか当然と感じる文化的秩序である。その「文化的-自然的」秩序は、人が順守するだけでなく、精霊が定め、維持する秩序でもある。その概念 (バタサン) は、文化人類学者が「文化」と呼ぶものに似ている。慣習、個性、習慣、道徳、商業活動などは、天のマグババヤの監視の下に、諸精霊により支配される (ただし、歩き方、血のつながり、素質のような遺伝的・生物学的要素もある種のバタサンである)。バタサンが冒されたり、それを逸脱したりすると、精霊が怒り、病気にさせる。悪霊は人間の否定的

な (悪い) 心を喜び、悪事をするよう人間をそそのかす。

ブキドノンの民俗心理学的カテゴリーは、そのような世界観に対応する。特に、怒りの「こころ」と病気の「こころ」は、そうした世界観の表象である。

例えば、既述のバリワスン儀礼とギムコロン儀礼は、人間と精霊の調和が乱れたときに行われる。前者の儀礼はコスモスにおけるバタサンの乱れに対応し、後者の儀礼は心的過程におけるバタサンの乱れに対応する。怒りも病気も「こころ」とバタサンの秩序の混乱の表象である。異常出産、臍の緒の凶兆、標準からの逸脱、不公平、騒動、子供の叱りすぎや褒めすぎなどもまた、すべてバタサンの秩序の乱れの原因となる。そこから生じる不幸な状況を防ぎ、災いを避けるために、儀礼を行わなければならない。

それゆえ、ブキドノンの産育慣行は、人間の行動を監視する精霊の目と、その怒りと災いを避けようとする人間の民俗心理学的カテゴリーの双方を考慮することなしには、理解しえない。

## 付記

本論は筆者の英文論文 [The Navel of the Cosmos: A Study of Folk Psychology of Childbirth and Child Development among the Bukidnon. Katsuhiko Yamaji ed., *Kinship, Gender and the Cosmic World*, Taipei: MSC Pub. Co., 1990] の全訳である。こうして改めて日本語にしてみると、本稿は、英米の1980年代の「失われた10年」を経て、1990年代後半以降に文化人類学の家族・親族論を再興させる契機となった Marilyn Strathern の “After Nature” (Cambridge University Press, 1992) や、身体論 (embodiment 論) で重要な貢献をしてきた Andrew Strathern の “Body Thought” (The University of Michigan Press, 1996) 等と、極めて近い視点から書かれていたことに気付かされる。彼らの理論は、それぞれ、新生殖医療と身体の視点から従来の西欧二元論 (自然環境・心身を含む biology と文化との二元対立性的思考、及び心身二元論) の克服を目指す優れたポストモダニズムの理論化の試みであったが、その「自然の文化性と文化の自然性の結合性 (相互浸透性)」の理論と研究の方向性は、拙論で論じたブキドノンの産育の「バタサン」と合一性 (congruence) の概念に一致していたといえる。また、その拙論の掲載されている上掲書、山路勝彦編『親族・性差 (kinship and gender = biology) とその世界観 (the cosmic world = culture)』

の表題そのものが、結果的に、自然と文化の合一性ないし両価性の研究を志向する親族論的テーマでもあった。筆者にとっても、ブキドノンの研究は、平行して実施したオセアニア諸地域に関するその後の研究（『身体と形象—マイクロネシア伝承世界の民族誌的研究』風響社 2001、『生命観の社会人類学—フィジー人の身体・性差・ライフシステム』風響社 2009等）をまとめるのに、有益な示唆を与えてくれた。今回、その英文報告の日本語訳を発表する貴重な場を与えていただいた山路勝彦氏と関係者の方々に感謝申し上げたい。なお、筆者は2010年8月から9月にかけて22年ぶりにブキドノン州を再訪し、大きな社会変化があったことを確認したが、産育の近代化が進みつつあるとはいえ、本論の内容に限れば、基本的に今でも現在時制で語れることを付記しておきたい。

参考文献

- Biernatzki, William E., 1967, Bukidnon Datuship in the Upper Pulangi River Valley. Alfonso de Guzman and Easter Pachenco eds., *Bukidnon: Politics and Religion*. Ateneo de Manila Univ. IPC paper, No. 11.
- Blair, Emma Helen, and James Alexander Robertson, 1906, *The Philippine Islands, 1493-1898*. Vol. 43. Cleveland: Arthur H. Clark Co.
- Cole, Fay-Cooper, 1956, *The Bukidnon of Mindanao*, Chicago: Chicago Natural History Museum.
- Clotet, Jose Maria, 1889, Letter from Father Jose Maria Clotet, Talisayan, May 11, (Translated in Frank Lynch 1967)
- Kawai, Toshimitsu, 1986, Midwives and Healers: Their Relationship to Bukidnon Customs Concerning Childbirth and Childrearing. Toh Goda ed., *Childbirth and Childrearing in Western Oceania*. Kobe: College of Liberal Arts. Kobe University.
- Lynch, Frank, 1967, The Bukidnon of North-Central Mindanao in 1889. *Philippine Studies* 15-3: 464-482.
- Lutz, Catherine, 1985, Ethnopsychology Compared to What? Explaining Behavior and Consciousness among the Ifaluk. White, G. M. and J. Kirkpatrick eds., *Person, Self and Experience*. London: University of California Press.,
- Lutz, Catherine, 1987, Goals, Events and Understanding in Ifaluk Emotion Theory. Holland, D. and N. Quinn eds. *Cultural Models in Language and Thought*. Cambridge: University Press.
- Lutz, Catherine, 1988, *Unnatural Emotions: Everyday Sentiments on a Micronesian Atoll*. Chicago: University of Chicago Press.
- Lutz, Catherine and Geoffrey M. White, 1986, The Anthropology of Emotions. *Annual Review of Anthropology*, 15: 405-36.
- Rosald, Michelle Z., 1980, *Knowledge and Passion: Ilongot Notions of Self and Social Life*. Cambridge: University Press.
- 土居健郎 1973『甘えの構造』弘文堂。
- 河合利光 1988「ブキドノン族の出産・病気・紛争」小川正恭・渡邊欣雄・小松和彦編『象徴と権力』社会人類学の可能性 2 弘文堂。
- 河合利光 1989「腹の心と石の心—トラックにおける性差と中心」牛島巖・中山和芳編『マイクロネシアの伝統文化の偏異と変容』国立民族学博物館研究報告別冊 6号、93-116頁。
- 河合利光 1990「後産の力—ブキドノン族におけるキョウダイの守護霊」『園田学園女子大学論文集』23号 113-130頁。
- 佐竹隆三 1984『腹と胸—「身体言語」ものしり辞典』大正大学選書10 大正大学出版部（第一書房刊行発売）。
- 結城文隆 1985「知恵者（ダトゥ）と勇者（バガニ）—ブキドノンのダトゥシップと共同体の特質」『東洋文化研究所』97号、115-146頁。

## The Navel of the Cosmos:

A Study of the Folk Psychology of Childbirth and Child Development among the Bukidnon

### ABSTRACT

This paper seeks to clarify how a shared cultural base construes the 'cultural construction of mind' and the 'cosmic order'. We expect to confirm how the latter order involves folk psychological categories as cultural systems with special reference to childbirth and child development customs amongst the Bukidnon of Mindanao Island. The most important concept here is *batasan*, the cultural order the Bukidnon feel is natural or right. The concept is very similar to what anthropologists call 'culture'. However, the order is not only cultural but also biological and psychological. *Batasan* order concerning custom, personal traits, habits, morals, commercial activities or the like are thought to be ruled over by a *Magbabaya* living in the 'navel' in heaven. The cultural-natural order is the cosmic order people must observe and spirits maintain. It is believed that anger and sickness are representations of disorders. When the *batasan* is violated or deviated, the spirits become angry and people become sick. The calamities and disorders of the cosmos must be prevented with special rituals for the spirits. We must understand the childbirth and childrearing customs of the Bukidnon as representations of their basic cultural thoughts that penetrate a person's mental process to link it with the cosmic order as a whole.

**Key Words:** Bukidnon, childbirth and childrearing, congruence of cultural-natural orders